

令和3年度 高校生川柳 受賞作品 講評

大賞	【句】 マスク下 いまだに知らない 友の顔	作) 伊豆原 彩花 様 (星城高等学校)
	【講評】 コロナで マスク生活が長くなる中、こうしたことは現実にもありえることです。進学して、友達ができ、学校生活にも馴染んで・・・でも、何か腑に落ちない、そう、マスクをとった元の顔を見たことがないのって、思いますよね。この作品が審査員の得票数が一番多かったというのも、それがきっとどれもが心に抱く疑問だからなのかもしれません。	
傑作賞	【句】 数学の 解けない問題 困りmath	作) 鈴木 芯 様 (愛知県立古知野高等学校)
	【講評】 川柳らしいユーモアと言葉のセンスが見事な作品です。マセマティックスをかたかなでマスとせずに、英単語をそのまま使って math とするあたりも斬新です。この作品は大賞ではないのですが選考委員会の委員長である学長がとくに推薦したい作品ということでマーカーをつけました。また、類句を考えておけという宿題もいただきました。	
友の絵に 秘めた才能 art 驚く 耳にたこ もうその話は ear めましょう		
傑作賞	【句】 帰路半ば 見知らぬ路地と 猫の声	作) 加藤 双葉 様 (愛知県立古知野高等学校)
	【講評】 毎日通って見慣れているはずの通学路に、今まで気づかなかった小さな路地を発見した新鮮な驚き。猫の声がきっかけで気づいたのでしょ。それなのに、猫の声を後に持ってきているのもおもしろい。一瞬がまるで写真のように止まって見える句です。大人になって忙しい日々を送るようになって、こういう日常に潜む発見を大切にしたいものです。	
傑作賞	【句】 目の前に セミのぬげがら がんばって	作) 中山 ひなた 様 (愛知県立古知野高等学校)
	【講評】 長い土中の生活を終えて、ようやく出てきたと思ったら数日の命しかないセミ。この作品はそんなセミそのものではなく、ぬげがらを見てどこかで懸命に鳴いて短い命を燃焼させているセミを思い、応援する作者のやさしい気持ちが感じられて、暖かい気持ちになりました。	
傑作賞	【句】 学期末 増える笑顔と 減らぬ体重	作) 久保 虎志楼 様 (愛知県立古知野高等学校)
	【講評】 1年生なのにコロナの巣籠もりで友達と会えないのはつらかったことでしょう。しかし、学期末にようやく会えたことであちらこちらに笑顔が・・・その喜びを、増える減るという対比を効かせたユーモアがひかる川柳らしい作品です。	
傑作賞	【句】 漢字書く 俺よりできる 帰国子女	作) 葛西 日向 様 (愛知県立古知野高等学校)
	【講評】 最近は帰国子女など地元の幼馴染ではない人たちが学校に入ってくる時代になっています。まだ日本の文化や日本語に慣れていないのかな、なんて思っていると、日本にかんする歴史や文化、漢字などの知識がびっくりするくらいある人も中にはいるものです。驚くと同時に、自分もしっかり勉強しなければ、などと反省させられることもありますね。	

傑作賞	【句】 オンライン 上は制服 下パジャマ	作) 藪 祐伍 様 (星城高等学校)
	【講評】 これは日本中、いや世界中の至る所で起きていることでしょう。このスタイルに慣れてくると、オンラインでも十分に目的とする情報を得ることができたり、意見交換ができたりと、実はわれわれは今までかなり無駄なことをしてきたのではないか、などと思ったりもする。おかしさと同時に、そんなことまで考えさせられる作品でした。	
傑作賞	【句】 人気ない 階段座り 本を読む	作) 佐藤 秋雅 様 (愛知県立豊橋西高等学校)
	【講評】 いつもなら喧騒につつまれる学校。コロナでだれもいなくなってしまった。そんな中、ひとり学校にやってきて、広い学校の中を歩き回ってみる。教室にも、校庭にもだれもいない。するとだんだん気持ちが大きくなって大胆になってくる、普段は人が行き交う階段にゆったりと腰をおろし、カバンから本を取り出し、読書をする。まるで、自分一人のためにこの広い学校があるかのような贅沢な気持ちに浸ってみる。そんな非日常の風景が浮かんできました。	
傑作賞	【句】 鳥鳴く 白い葉は 赤くなる	作) 佐藤 秋雅 様 (愛知県立豊橋西高等学校)
	【講評】 前の句と同じ作者の作品です。独特の感性がひかります。前の作品からも、葉という言葉からもきっと読書好きな人なんだろうと想像できます。カラスという黒い鳥、新品のときには白かったしおりが、使い込んでいくうちにいつの間にかすこし汚れてくる。それを赤と表現する技巧も光る。カラスがなくということは、きっと夕暮れなのでしょう。だから、夕焼けで辺りが赤くなって、そう見えたのかななどとも考えさせられます。読書の手を休めてふとわれにかえる日没前の瞬間、そんな絵のような情景まで浮かんでくる作品です。この作品も学長の推薦がありました。	
傑作賞	【句】 我が意思を 伝えたいのに 当たらない	作) 富安 友貴 様 (星城高等学校)
	【講評】 普段は意見を言うなんてどことなく気恥ずかしいのに、今日は珍しく言いたいことがある。意見を言いたい。そんな時に限って、なぜか先生が当ててくれない、思い切って手をあげようか。それとも黙ってしようか。自分から積極的に意見を言えない日本人的な心持ち、教室でイジイジとする自分へのもどかしさ。そんな心の動きも伝わってきます。我が意思の「我が」という少し古めかしい言葉もユーモアになっている作品です。	
傑作賞	【句】 仲良い子 気付かぬうちに 見えない壁	作) 中野 羽琉 様 (星城高等学校)
	【講評】 学校に入ってしばらくすると、いつしか友達もできて生活にも慣れてくる。でも、ある日、友達の態度が前と違うと思うこともあるかも知れない。自分も強がって心にもないことを言ってしまう、本当は仲良くしたいのに。友達関係の悩み、若い頃には尽きないものです。でも、あまり悩まずに、時には外の広い世界にも目を向けてください。今、自分がいるせまい世界とは別の世界、別の価値観もある、そのことに気づけば、心の持ち方も変わるでしょう。	